

カタカナの効用

桑原 正紀

前回は漢字の効用について書いたので、今回はカタカナ表記の効用について考えてみたい。

現代短歌の大きな特徴に口語表現の浸潤があることは言うまでもないが、それと肩を並べるほどの特徴として、カタカナ表記の増殖があるだろう。外来語はもちろんのこと、漢字や平仮名でいいところをあえてカタカナ表記を選択するケースも目立ってきている。

瞬きを忘れてしまった少年のカノジョはメモリーカードに三人
野村まさこ『夜のおはよう』

女生徒がスクロールさせたケータイのLINEに束ねたトモダチ百人

マジ、ヤバイ、メンドクサイで事足りる生徒の口癖
つる ヤバイな

この歌集は学校の保健室という場所を舞台に、若者の思考や生感をリアルに描出している。まさにカタカナ語の多用が、若者文化と符合して効果的に働いている。

本誌九月号から少し拾ってみよう。

農耕のほひとぼしきファミリィが十勝でバターを作る
(なつぞら) 薄葉 茂 宮城
人間と人型ロボットが泣くときにどちらの涙をぬぐう
てやらむ 竹内みどり 鳥取

現役の頃の自慢を聞かされて微笑みながらミュートにしてゐる 永田恵美 福岡

マロニエの花房赤く口紅よりルージュの色と言ひたくなれり 荻原栄子 埼玉

一首目は、ドラマにありがちな生活感や泥臭さのない家族を、「ファミリィ」という表記で言い得ている。二首目は、SFつまり空想の産物であった「アンドロイド」が現実味を帯びてきたことを、ルビという重層表現で表そうとした。三首目の「ミュート」はテレビなら「消音」、スマホなら相手に気づかれず非表示にする機能のことだが、いずれにせよそつと拒絶している感じがよく出ている。四首目は、カタカナ語の持つオシャレ感という一面を言い得ていて面白い。私たちが警戒していたのはまさにこの点で、日本語で済むところを何となく外来語で言うオシャレで上等な感じがして、安易に使ってはいないか。

作歌をしながら、一首の中である語や表記がどう生きていくか、常にケースバイケースの判断が求められるわけだが、カタカナもまたその例外ではない。